保育者養成校におけるピアノ指導法の一考察

Piano Teaching Methods in Preschool Teacher Education Programs

横　溝　聡　子※
Toshiko YOKOMIZO

Preschool teacher education programs require piano lessons as part of their curriculum, but there are many students in these programs who have never learned to play or do not have enough experience. This current study explored possible methods of teaching the students basic piano skills in the short span of two years. In this report, the researcher looked at the textbook and scores of children's songs to figure out the necessary skills and knowledge needed for students to effectively play children's songs on the piano. As a result, the teaching goals for the two years may be determined. They found that encouraging students to consciously apply the textbook material to specific children's songs may be an effective method of teaching piano.

１．はじめに

明治５年に布告・施行された新しい学制によって音楽教育の導入が始まり、西洋音楽が積極的に取り入れられてきた。ピアノ教育も時を同じくして始まっている。日本初の官傭ピアノ教師はドイツ人の松野クララ（旧姓Clara Zitelmann 1853 ～ 1941 ？）である。クララは明治９年に東京女子師範学校附属幼稚園の主任保母となり、明治10年11月からは、東京女子師範学校と附属幼稚園を通じて唯一あったピアノを伴奏に用いて唱歌授業を実施した。クララの最初の弟子として保母たちがピアノの学習を始めたのではないかと推測されている[1)]。その後、クララやアンナ・レール（Anna Löhr 1848 ～ ？）による宮内庁式部寮雅楽課でのピアノ伝習、音楽取調掛（後の東京音楽学校・現東京藝術大学）や女子師範学校でメーソン（Luther Whiting Mason 1818 ～ 1896）によるピアノ指導が始まり、楽器の普及とともに各地の師範学校でもピアノ指導が行われ、現在に至っている[2)]。幼稚園・保育園での音楽活動もこの明治期の新しい音楽教育導入が基礎となり、また、昭和31年に施行された「幼稚園設置基準」第10条第４項[3)]においてピアノまたはオルガンを備えなくてはならないと規定されたことにより、保育現場でのピア

※　音楽科

ノの使用が当然のこととなってきた。そのため保育者養成校でピアノの学習は欠かせないものとなった。しかし、昔も今もピアノ未経験者やピアノ初心者にとってピアノの演奏技術を身に付けることは容易ではない。ピアノ経験者であってもピアノ演奏や読譜の基礎が身に付いていない学生も多く、ピアノに対する苦手意識を持っている学生は多い。学生にとっては日々の授業はもとより、実習や就職試験でのピアノ演奏が目の前の大きな課題であろう。

ピアノ演奏において音楽を表現するためには、技術だけではなく感性や創造性などが大切であるが、それだけでは表現はできない。やはり表現するための知識や基礎技術があってこそ音楽表現が生きてくる。保育者養成校における短期間の授業の中で、ピアノを弾くための知識や基礎技術をしっかりと身に付けさせるためにどのようなアプローチができるか。本稿では、教則本で扱われている演奏技術の学習課題と「生活の歌」など幼児曲の演奏のために必要な技術との関連性を検証し、理解しやすく効果的なピアノ指導法を考察していきたい。

２．教材から見たピアノ指導法

本学幼児教育学科では、１年次の必修科目「保育表現技術　器楽Ｉ」において、ピアノの指導を行っている。学生は、90分１コマの授業を45分ずつ個人レッスンとML（ミュージックラボラトリー・システム）を使用しての集団レッスンを受けることになっている。平成29年度の履修者147名のうち、ピアノ学習経験のない学生は全体の約３分の１である。また、学習経験があってもほとんど初心者に近い学生もおり、能力には大きな差がみられる。ピアノ初心者やピアノを苦手としている学生の特徴としては、楽譜に書いてあることが理解できていないことや、次に弾く音だけに集中してしまい、音の動きの流れを掴むことをしないために手の動きが連動していかないことなどから、苦手意識を持つ場合が多い。苦手意識を少しでも払拭するために、楽譜を読み解くコツや演奏するときの意識の持ち方などが理解できるようになれば、新しい曲を学習する際に取り組みやすくなるのではないだろうか。

１）『幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト　改訂版　―レッスン24とその応用―』[4)]

本学では、ドレミ楽譜出版社の『幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト　改訂版　―レッスン24とその応用―』を使用している。この『ピアノ・テキスト』は本学幼児教育学科の教員をはじめとする全国大学音楽教育学会の東北・北海道地区の会員が中心となって編集し、1994年に初版が発行されたものである。その後、2014年に改訂版が出版されている。幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成校での、１～２年という短い期間のピアノ指導に適した教材としてまとめられたのがこのテキストである。

幼児教育の現場で使用されている音楽を鑑みた時、それまで一般に広く使用されていた『バイエルピアノ教則本』では不足する部分や使いにくい部分の解消の必要性が生じていた。『バイエルピアノ教則本』は、明治初期に西洋音楽が導入され、ピアノ教育が始まった際にピアノ学習用に用いられた教則本である。その後も、現在までピアノ学習のための代表的導入教材として使用され続けている。片手練習から、両手の練習に移行し、それぞれの段階で同じようなテクニックの反復練習があり、それぞれのテクニック習得に無理がない。また、機能和声で古典的なスタイルにより、学習者が理解しやすくなっている。幼児でも１年もしくは１年半で習得できるように書かれた入門書である。この１冊を終えると、かなり基本的な奏法が身に付き、次のステップに進みやすいため、多くの保育者養成校でも使用されている教材である。しかし、この教則本の導入部はト音譜表のみでヘ音記号が出てくるのが遅く、また、使われている和音は三和音が中心となっており、現代の多様な和音感への対応ができないなどの欠点が挙げられよう。

そこで、この『ピアノ・テキスト』（以下テキストとする）は、始めから大譜表を使用し、中央のc^1から左右に音域を広げるように設定されている。内容は、基礎学習のためのLesson１からLesson24までの「基礎曲」、そして、「応用［そのⅠ］参考曲」と「応用［そのⅡ］表現のための音楽」の３つの部分で構成され、全121曲のうち独奏曲は96曲、アンサンブル曲は25曲である。巻末には音階（スケール）と終止形（カデンツ）、コードネーム表、音楽用語解説が掲載されている。このように、このテキストは個人や集団での授業でも使用できるように独奏曲だけでなく、アンサンブル曲も数多く取り入れられている。１年間でLesson12、２年間でLesson24まで到達することを目標として編集されており、本学でも１年次にLesson12までは必修となっている。ピアノ学習経験者は、十分なレベルに到達していれば、このテキストの途中からも使用できることになっており、またこのテキスト以外の使用も可能である。

このテキストについてLesson24（以下L24などと表示）までの独奏曲を取り上げ、それぞれの曲が演奏技術面などどのような学習すべき内容で構成されているのかを具体的に表にまとめていくこととする。

番　号	曲　名	主な課題や学習内容
L2-1	蛙の合唱を歌いながら「ド」を弾こう	ハ長調　4／4拍子　c^1の位置での左右の交互の４分音符　数え方と大譜表c^1の場所の学習　４分音符　４分休符　２分休符　全休符
L2-2,3	ふたりでおはなし ゆっくり歩こう	ハ長調　4／4拍子　c^1に１の指のポジション　音域右手c^1～e^1　左手a～c^1　左右交互の動き　反進行　付点２分音符
L2-4	ほたる	左手はaに固定された伴奏　左右同時の打鍵
L2-5	かげぼうし	２／４拍子　左右の並進行
L2-6	階段	既習の音型での表情変化の学習

番　号	曲　名	主な課題や学習内容
L2-7	やまびこ	同じ鍵盤でもト音譜表とヘ音譜表で記譜の位置（加線）が違うことを理解する学習　右手ト音譜表a～e^{1}　左手ヘ音譜表a～e^{1}のポジション　強弱記号 ***f*** と ***p***
L2-8	うかんでしずんで	３/４拍子　強弱変化やアーティキュレーションの学習　強弱記号***mf***と***mp***　cresc.　dim.　スラー　フレーズのまとまりを感じる
L2-9	もぐら	Allegretto ３度の動きの学習
L2-10	となりどうし	Andante　スラーとスタッカート　手首の使い方（脱力）の学習
L3-1	「ソ」まで行こう	音域c^{1}から上下のgまでの音
L3-2	大きな時計	Lento　C= ４/４　左手gに１のポジション　fとgの２音同時打鍵　フェルマータ
L3-4	シンメトリー	音域右手c^{1}～g^{1}　左手f～c^{1}　左右シンメトリーの動き
L3-5	舟ひき	ト音譜表下２本の加線　ヘ音譜表上１本の加線　１と２の指を３度、１と３の指を４度に広げる動き　右手ポジション移動
L3-6	子守歌	ヘ音譜表のcの位置　c～gの学習　両手別々の動きが入る　指使いの工夫
L3-7	マクドナルド爺さん	左右の手の受け渡しによるメロディックな動きと、左手の伴奏的な動き
L3-8	牧歌	左右の手の受け渡しによるメロディックな動きと、左手の伴奏的な動きのどかな気分の表現　タイ
L3-9	バグパイプ	cとgの和音による伴奏形　右手に８分音符の動き
L3-10	嘆き	臨時記号フラットとシャープ　リピート記号　D.C.　コーダの理解
L4-1	音の階段	ハ長調の音階　４オクターブにわたるcの位置　音域c～c^{3}　L.H. R.H. 左右の手の大きなポジション移動や手の交差
L4-2	頂点をめざして	和音の準備　分散和音　左右の手の受け渡しを滑らかにしながらポジション移動の練習　４分音符と８分音符の数え方とリズムの練習
L4-3	登山	和音の準備　分散和音　8va　左右の手の受け渡しを滑らかにしながらポジション移動の練習　ペダルの練習
L4-4	つみ木あそび	分散和音　Ⅰ、Ⅳ、Ⅴの和音　ペダルの練習
L4-5	大きな栗の木の下で	Moderato　左手が和音で伴奏　Ⅰ、Ⅳ、Ⅴの和音　右手１の指をくぐらせる動きでポジション移動
L4-6	トロイカ	Allegro　８分音符で刻むリズム　音域左手A～f　右手１の指に関連した動き　オクターブの跳躍　アクセント
L4-7,8	階段にちゅういⅠ、Ⅱ	左右の手のハ長調の音階練習　指くぐり　指またぎ　伴奏形は３度から６度の幅までさまざまに変化する練習
L4-9	こぎつね	音階の動きによるポジション変化　並進行　反進行　斜進行
L5-1	ボートのうた	Andantino　６/８拍子　Ⅰ、V_7の和音　右手の分散和音と同音連打同じ音型で指の交替とポジション変化の練習
L5-2	わらってないて	３連符　音域H～d^{3}　手の交差　長３和音と短３和音の表情の変化
L6-1	かわいいオーガスチン	３/４のワルツのリズム　付点のリズム　右手の６度に開くポジションとポジション移動
L7-1	インディアンの踊り	力強いリズミックな表現　ヘ音記号下の加線Eの学習

番　号	曲　名	主な課題や学習内容
L7-3	土人の踊り	低音域G_1～Dの学習　短前打音　強い音 ***ff*** と ***sf***
L8-1	すずめ	臨時記号　３連符　テンポの変化　表現力の学習（楽語も含む）
L9-1	カデンツ	２/２拍子　カデンツ　和音記号とコードネーム　基本位置と転回位置
L9-2	三和音	三和音　左右の手の和音の学習　ポジション変化　付点のリズム
L9-3	ビーマーチ	オクターブの和音　ト長調、ヘ長調での移調奏の学習
L10-1,2	ハ長調の音階Ⅰ，Ⅱ	ハ長調の音階の学習　３連符のなめらかな動き
L10-3	こもりうた	重音のなめらかな動き　ポジション移動 ***p*** と ***pp*** 手の交差
L10-5	オリンピア・マーチ	付点８分音符と16分音符の付点のリズムの学習　素早い手の動き（広げる、指またぎ、ポジション移動）をする練習
L11-1	小さなワルツ	ワルツのリズム　８小節１フレーズの感じ方　左右の素早いポジション移動や指を広げて柔軟に使う練習
L12-2	へいたいのこうしん	左右の手の旋律と伴奏の役割交替　重音での多声的動き
L13-1	おやつのじかん	３声部の動き　短７の分散和音　広い音域のポジション変化　変奏
L13-3	こもりうた	３/８拍子　左手が２声になった動き
L14-1	チェルニーのおじさん	ニ長調の音階と和音　音符の連続の練習　動きにくい指の訓練（リズム変奏の方法）
L14-2	スケールあそび	ト長調と変ホ長調の音階の運指の練習と和音　手から手への受け渡しの練習　ポジション移動
L14-3	二列になって	付点のリズム　伴奏音型のパターンの変化　重音の練習　Ⅴ調のV_7
L15-1	ピアノのかいだん	音階と分散和音　音価の変化　半音階的進行　指の持ち替えの練習　ペダルの使用
L16-1	くちぶえ	６/８拍子　ト長調からホ短調への転調変化によるニュアンスの違い　ペダルの練習
L16-2	ロシアマーチ	ニ長調　ユニゾンの堂々とした響き　音階的動きによるポジション移動　手の素早い交差　ペダルの使用
L17-1	さようなら	ホ短調　アウフタクトのフレーズ
L17-2	百年祭マーチ	変ロ長調から変ホ長調への転調　アウフタクトのフレーズ　付点のリズムと３連符　メロディックなオクターブ　メロディーラインの保持
L18-1	土人のおどり	音価の違いによるスタッカート奏法とテヌート　手の交差　臨時記号
L18-2	小さな嘆き	左右の役割の交替　16分音符の動きの練習　分散和音、スタッカート、レガート奏法　臨時記号
L19-1	チョットシタケンカ	イ短調からイ長調への転調　半音階的進行　パターン化された伴奏音型とアーティキュレーションの違い
L19-2	幼稚園マーチ	アウフタクトによるフレーズの捉え方　同音連打の指の交替と素早い手の開き　ハ長調からヘ長調への転調　アルベルティバスと付点音符の関係
L20-1	しまりすレジェ	軽快に動くニュアンス　休符が多く使用されている６/８拍子　臨時記号
L20-2	いもむしとちょうちょう	広い音域の使用C～a^2とポジション移動　ハ短調からハ長調への転調　テンポの変化　左手に短前打音

番　号	曲　名	主な課題や学習内容
L21-1	「つき」による七つの変奏曲	ヘ長調からヘ短調への転調　主題と変奏　変奏による様々なテクニックの習得（伴奏形の変化、アクセント・テヌート・アーティキュレーションの変化、３度での動き、リズムの変化、強弱変化）
L21-2	ナショナル・マーチ	伴奏形の様々な変化　保持音のある伴奏形　ペダルの練習　手の交差
L21-3	牧歌	６/８拍子　重音の保持音のある伴奏形　複短前打音　広い音域への跳躍
L22-1	夕方のうた	イ長調　左手の重音レガートでの動き　16分音符の練習
L22-2	よう精のおどり	保持音のある伴奏形　短前打音　半音階的進行　ト長調からハ長調への転調
L23-1	天使の声	分散和音での滑らかな３連符　手から手への滑らかな受け渡し　和音の転回系の練習
L23-2	乗馬	スタッカートとスラー　半音階的進行
L24-1	ワルツ	変ホ長調　アウフタクト　半音階的進行　分散和音

曲にはそれぞれ標題が付けられており、曲のイメージを掴みやすくするとともに、単なる指のメカニックな訓練ではなく、表現力を合わせて身に付けられるようになっている。L16以降は、演奏技術も応用的なものが多くなっており、さらなる技術や音楽的表現力の向上が図られている。テキスト執筆者の曲や、日本人作曲家の作品も多く取り入れられており、特にテキストの後半は古典的で単純な三和音だけにとどまらず様々な和音が登場し、音響的な効果を体感できる曲や現代的な音の感覚を養う曲も含まれている。このテキストは一つ一つ段階を追って学習するポイントが明確で、様々な演奏技術や表現力が身に付くように編纂されていることが見て取れる。

２）『ピアノ・テキスト』と幼児曲「生活の歌」に必要とされる演奏技術の対応

実際に幼児曲を演奏するにあたってどのような演奏技術が必要とされるのだろうか。保育現場では、臨機応変にコード付けや即興演奏ができる技術や子供とのかかわりをもちながら表現する力のほうが必要であるという意見もあるが、ここでは、幼児曲を楽譜通りに演奏することを前提として考察していきたい。

学生が実習でも演奏することが多い「生活の歌」を取り上げる。ここに挙げた曲は、本学の１年の後期（Ⅱ期）の試験課題にもなっている。それぞれの曲で必要とされる技術が、テキストではどのレベルまで到達していればよいかの検討を試みる。

まず、テキストのL10-5「オリンピア・マーチ」と、比較的様々な技術的要素が含まれている「おかえりのうた」を具体的に対比させて見ていくこととする。「オリンピア・マーチ」には以下のような学習課題が盛り込まれている。双方の曲に共通する部分を①、②のように示す。

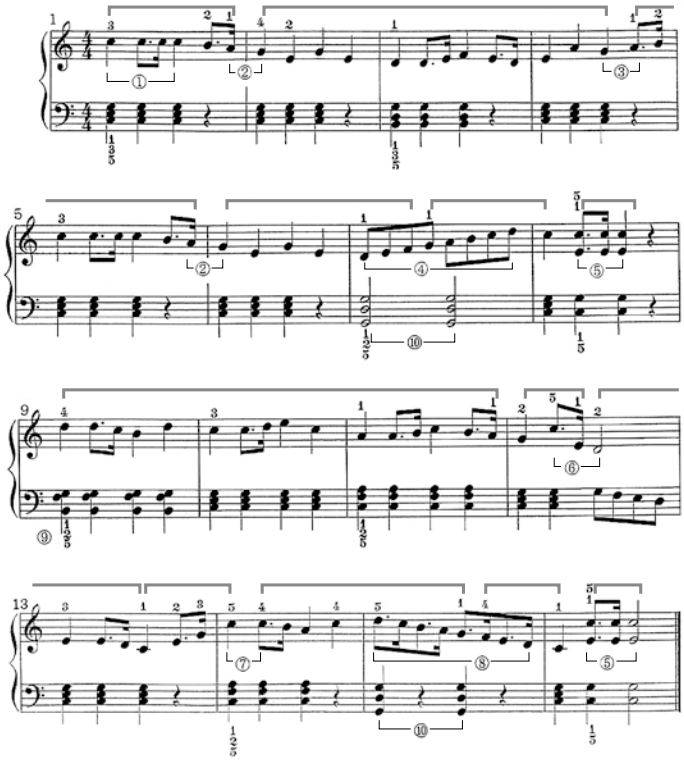
「テキスト Lesson10-5 オリンピア・マーチ」（譜例１）

右手：太線は、固定された１つのポジションで演奏できる部分を表している。旋律は４分音符と付点のリズムが特徴的である①。１小節目から２小節目にかけて指またぎによるポジション移動が行われる②。２小節目から４小節目まではレからラのポジションのまま弾くことができる。４小節３拍目から４拍目にかけて指くぐりによってポジションが移動する③。７小節目は音階の学習である④。８小節目は６度の幅に手を広げる⑤。９小節目から11小節目ではラからミのポジションに移動してそのままの手の位置で３小節間弾く。12小節目は、素早く６度の幅に手を広げる動きと指またぎの動きの学習である⑥。13小節目は移動したポジションから、オクターブに手を広げての分散和音である。14小節目で指の持ち替えによるポジション移動を行う⑦。15小節目は音階の学習。連続する付点のリズムである⑧。16小節目は６度の開きである⑤。

左手：Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、V_7の和音が中心である。４分音符で３拍奏した後に４分休符が入るリズムと、９小節目からは４分音符で４拍奏する伴奏形⑨の変化がある。６小節目と15小節目には手をオクターブに広げる和音も出てくる⑩。

この曲は、マーチのテンポや付点の弾むリズム、素早いポジション移動、音階の上行形・下行形の練習、また音階の８分音符での動きと付点のリズムによる動きの違い、基本的な伴奏形などが学習課題となっている。

（譜例１）[5)]
Lesson10-5　オリンピア・マーチ



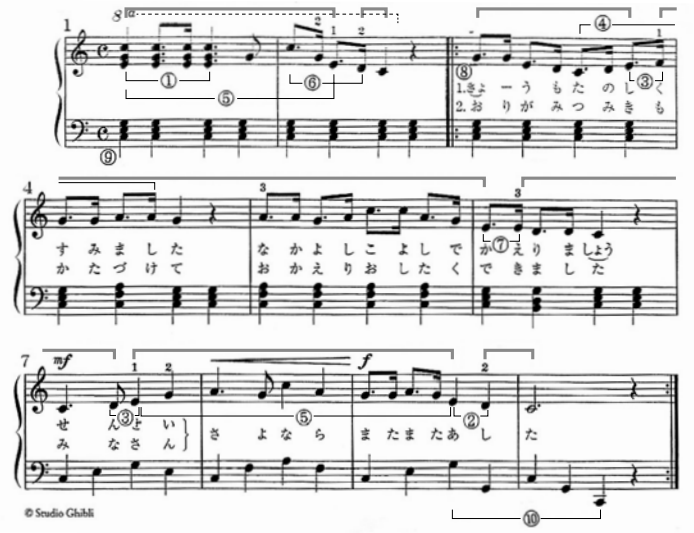
「おかえりのうた」（譜例２）

右手：旋律の４分音符と付点のリズムは「オリンピア・マーチ」の冒頭と同じである①。１小節目から２小節２拍目まではミソドの６度の開きのままで弾くことができる⑤。２小節２拍目には「オリンピア・マーチ」の12小節目と同じ素早い指またぎが現れる⑥。３小節目には指くぐりによるポジション移動がある③。３拍目から４小節２拍目までは音階の動きである④。３小節目から６小節目までは連続する付点のリズムである⑧。６小節目は指の持ち替えによるポジション移動である⑦。７小節目は指くぐりでポジション移動をする③。６度に手を開いたポジションのまま９小節まで弾き⑤、指またぎ②をして７小節目と逆の動きで終わる。

左手：６小節目までのⅠ、Ⅳ、Ⅴの和音の伴奏形は、４分音符で４拍奏していく⑨。７小節目からは分散和音になる。９、10小節目は手をオクターブの幅に開いての動きになる⑩。

このようにL10-5「オリンピア・マーチ」の学習内容は、「おかえりのうた」に必要とされる知識や演奏技術と共通点が多いことが見て取れる。L10-5の学習内容をしっかり身に付けることで「おかえりのうた」の演奏が容易になると言えよう。

（譜例２）[6)]
おかえりのうた



次に、「生活の歌」の中でも他の曲と比べて比較的な難易度が上がる「さよならのうた」を取り上げる。この曲の演奏に必要なテクニックの学習ができると思われるL14-3「二列になって」と対比させて見ていくこととする。

「テキスト　Lesson14-3　二列になって」（譜例３）

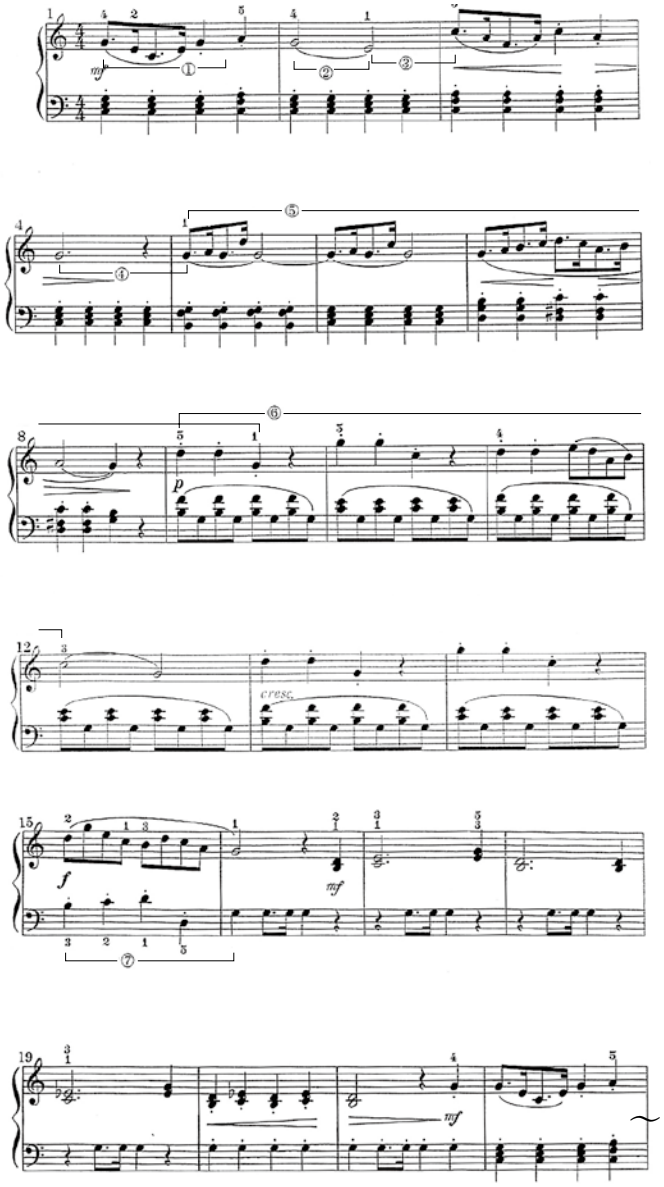
右手：旋律は付点と２つの４分音符のリズムで始まる①。２小節目は手を縮め②、３小節目に向かって手を広げる動きになっている③。４小節目から５小節目は指の交替によるポジションの移動である④。５小節目から９小節目までの４小節間は同じポジションのまま奏する⑤。

９小節目から12小節１拍目までは同じ音程の幅のままのポジション移動である⑥。15小節目は指またぎによるポジション移動。16小節目から21小節目は３度の重音の練習である。ここは長３和音と短３和音の響きの違いを感じる学習にもなっている。

左手：Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅴ$_7$、Ⅴ調のⅤ$_7$の和音からなる伴奏形は、和音の基本形や転回形などの形に変化し、リズムパターンにも変化がある。15小節目は和音ではなく旋律的な動きの終止形である⑦。この部分は手を広げる動きも必要となり、右手の指またぎや８分音符での少し複雑な動きとの兼ね合いが難しい部分である。

曲全体としては、スタッカートの躍動感や付点の弾むリズム、そしてレガートで歌わせる表現力の学習も課題の一つである。片方の手は音を切り、もう片方の手はレガートで奏する部分が８小節で左右交替し、また、両手ともにレガートあるいはスタッカートの部分も現れる。これは、左右それぞれの手を別々にコントロールするテクニックの学習である。さらに９小節目からの左手の動きは、音の数の多さや反復によってうるさくなりがちで、左右の音量バランスを意識し、左右の手の強さをコントロールすることも求められている。

（譜例３）[7)]
Lesson14-3　二列になって

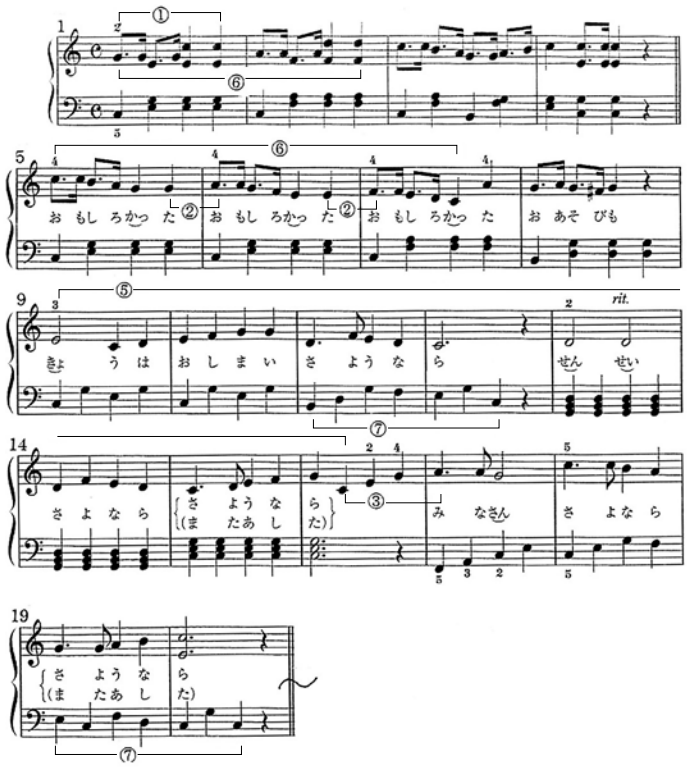


「さよならのうた」（譜例４）

右手：冒頭の付点と２つの４分音符のリズムは「二列になって」と同じである①。１小節目から２小節目にかけては、１音隣へ同じ音程の幅のままポジションを移動する⑥。５小節目からも同様に１小節ごとにポジション移動が行われる⑥。９小節目から16小節目までの８小節間は固定されたポジションで奏することができる⑤。16小節目で手を６度に広げる③。

左手：Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅴ$_7$の和音からなる伴奏形は、様々な動きのパターンで現れる。11小節目から12小節目、19小節目から20小節目は旋律的な動きの終止形である⑦。17小節に出てくる７度の分散和音の動きはL13-1「おやつのじかん」で学習している。

（譜例４）[8)]
さよならのうた



この曲は、弾む付点のリズムと、中間部のメロディックな動きの表現の対比が求められる。

冒頭のリズムパターンが同じであること、手を同じ音程の幅に保ってポジション移動するテクニックが必要となること、表情の対比が求められている点などから、「さよならのうた」は、L14-3「二列になって」での学習が基本となることが、ここでも理解できる。

本学科では、その他に３曲の「生活の歌」が学習課題となっている。それぞれの曲の演奏に必要な知識や技術が、テキストでそれまでに習得した知識・技術で演奏可能であると考えられる曲の番号を、前述の２曲と合わせて挙げてみることとする。

生活の歌

曲　　名	必要とされる知識や技術	テキスト
朝のうた	ハ長調　2／4拍子　付点と複付点のリズム　V_7　手を6度やオクターブに広げる動き　9度にわたる分散和音	L10-5
おはようの歌	ニ長調　2／4拍子　付点のリズム　V_7　手をオクターブに広げる動き	L10-5
おべんとう	ハ長調　2／4拍子　付点のリズム　V_7	L10-5
おかえりのうた	ハ長調　4／4拍子　付点のリズム　高音部から中音部へのポジション移動　素早い指またぎや指くぐり　手をオクターブに広げる動き	L10-5
さようならのうた	ハ長調　4／4拍子　付点のリズム　V_7　頻繁なポジション移動　様々なパターンの伴奏音型	L14-3

「朝のうた」は、2小節目の9度にわたる分散和音の動きが難しい。指くぐりでポジション移動する技術が身に付いていないことを考慮した指使いが楽譜には書かれているが、指を広げてしっかり表現できるだけの技術が身に付いていない場合や手が開かない場合もあり、指導に工夫を要する。13小節目には複付点音符が出てくるが、テキストには複付点音符は出てこないため、ここではリズムに対する理解を深めさせる必要がある。「おはようの歌」はほぼポジション移動がないため、弾きやすい。「おべんとう」もポジション移動が少なく弾きやすいが、付点のリズムと2つの8分音符のリズムを正確に取ることが難しい。これらの曲は、L10-5「オリンピア・マーチ」まで到達していれば、ある程度弾きこなすことができると考える。

3）『ピアノ・テキスト』と保育士試験課題曲に必要とされる演奏技術の対応

次に、保育士試験の課題曲についても同様に検討を試みる。平成25年から平成29年の課題曲を取り上げる。この試験では、伴奏はピアノだけでなくギターなどの使用も可能であり、楽譜も指定はなく、簡易楽譜によるものや自分で伴奏付けをすることもできる。しかし、ここでは、本学で使用している、音楽之友社「明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌」と、ドレミ楽譜出版「保育・教育の現場で使える！弾き歌いピアノ曲集」の2冊の歌集を取り上げ、検討を試みる。「明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌」は、可能な限りオリジナル楽譜が採用されている。「弾き歌いピアノ曲集」は簡易伴奏譜のものも多い。「かたつむり」「ちびっか・ぶーん」「おへそ」はこれらの曲集に伴奏譜が収録されていなかったため、表は空欄になっている。それぞれの課題曲は、楽譜によって大きく難易度に差がある。オリジナル楽譜での演奏には、かなりの演奏技術が必要であることがわかる。

保育士試験課題曲

年度	曲　名	必要とされる知識や技術	バイエル	テキスト
H29	こいのぼり	①ニ長調　３／４拍子　音域Ｄ～ｄ^{2}　左右ともに重音で、４声部の動きも現れる ②ハ長調　３／４拍子　音域Ｇ～ｃ^{2}　旋律と簡単な伴奏(簡略譜)	97 73	L16-2 L10-5
	一年生になったら	①へ長調　４／４拍子　音域Ｄ～ｇ^{3}　複付点音符　右手で旋律と伴奏を同時に表現する必要性	102	L17-2
H28	かたつむり			
	オバケなんてないさ	①ト長調　４／４拍子　音域Ｄ～ｄ^{3}　３連符と付点のリズム　短前打音	106	L17-2
H27	海	①ト長調　３／４拍子　音域D～ｄ^{2}右手は２声の動き　左手分散和 ②ト長調　３／４拍子　音域G～ｄ^{2}　音階　２指と４指を広げる動き	72 65	L11-1 L10-5
	ちびっか・ぶーん			
H26	おつかいありさん	①ニ長調　２／４拍子　音域A～ｄ^{2}　付点のリズム　オクターブの跳躍　半音階的進行　スタッカートとスラー　アルペジオ	89	L14-3
	おへそ			
H25	めだかの学校	①ニ長調　４／４拍子　音域D～ａ^{2}　４声での動き　アルペジオ	95	L17-2
	そうだったらいいのにな	①ハ長調　４／４拍子　音域C～ｃ^{3}　付点と複付点のリズム　左右ともに動く音域が広い ②ハ長調　付点のリズム　半音階進行　オクターブの動き　音階	102 88	L17-2 L14-3

参照楽譜　①明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌[9)]
②保育・教育の現場で使える！弾き歌いピアノ曲集[10)]

まとめ

ピアノ初歩段階で確実に身に付けるべきテクニックとしてまず挙げられるのは、ポジションを保つ中での奏法とポジション移動をどのようにしていくかであろう。曲の中では、１つのポジションのまま何小節も演奏できる部分がある。ポジション移動も指の交差もない運指は「静かにした手」とも呼ばれており、『バイエルピアノ教則本』ではその半分近くがこのテクニック習得に費やされている[11)]。ピアノの初歩の段階では、学習者は次の音を読むこと弾くことに精一杯になり、先までどのように音が進み、指をどのように準備していったらよいかの判断が付けられない。音の動きのまとまりを見つけ、ポジションの準備の意識付けを習慣化させていくことが大切である。また、指を広げる、縮める、指を交替させる、跳躍するなど、様々な方

法でのポジション移動を意識づけることも重要なポイントであろう。更に、左右の手の独立した動き、特に幼児曲を演奏する場合に頻繁に用いられる伴奏形の習得も求められる。幼児曲には付点８分音符と16分音符からなる、いわゆる付点のリズムが大変に頻繁に使用されている。このリズムはスキップのリズムとも言わるが、楽しげに元気よく弾む感じを表現するのに適したリズムであるといえよう。テキストでは、L10-5「オリンピア・マーチ」でこのリズムが現れる。この曲は、このテキストの独奏曲での40曲目にあたるが、『バイエルピアノ教則本』では、このリズムは88番にならないと登場しない[12)]。音符やリズムへの理解ができ、ピアノを弾くことに慣れてこないと正確にかつ生き生きと表現することが難しいリズムである。

テキストと幼児曲を比較検討した結果、L10-5「オリンピア・マーチ」は、基本的な伴奏形になっている事と、幼児曲に頻繁に使用されている付点のリズム、音階、手の幅を広げる動きや指の交替によるポジション移動など、基本的な動きが入っていることから、このレベルまで到達すると、ある程度の幼児曲を弾きこなすだけの力がついてくると言えよう。しかし、少し難易度が上がると、L14-3あるいはL17程度までの学習が不可欠であることが見えてきた。ピアノ指導は、３才ごろから可能であり、一つ一つ教則本の課題をこなしていくことで確実な演奏技術を身に付けさせることができる。短大では幼児期のようなゆっくりした進度で進むことは不可能であるため、しっかりと頭で理解し、実践できるようにしていくことが必要であろう。テキストで扱われているピアノ演奏技術や読譜力を短期間に確実に習得させるためには、それぞれの曲で課題となっている内容を具体的に学生に示すことが大切である。テキストで学習した内容と幼児曲の演奏に必要な知識・技術について具体的に関連性を持たせていくことで、楽譜を「読む」ことと「弾く」ということの結びつきにイメージを持つことができるようになるのではないだろうか。ピアノ演奏への理解が深まることにより、更に学習への意欲を喚起できると考える。

しかし、ここまで取り上げてきたことは、ピアノを演奏する上での導入部に過ぎない。本来のピアノ演奏や、表現はここが出発点である。楽譜から音にしただけでは、音楽でも表現でもない。指や腕、身体の様々な使い方を習得すること、音色や音質など楽器の響きや音を聴く耳を育てることとそれを実際に表現すること、曲のキャラクターをどう表現したいか想像力や発想力を持ち、更にそれを表現するための演奏技術を身につけることなどが必要である。テキストには、マーチ、ワルツ、舟歌や子守歌の揺れるリズムなど様々なリズムの特徴を表現する曲も多く含まれている。また、すべての曲に標題がついていることから、表現力の学習を技術の学習と同時に行うことができる。楽譜から音にするということ、指をどのように運んだらよいかをイメージしやすくし、応用力を身に付けさせることで譜読みに時間がかからなくなり、譜読みの段階から次の表現力育成の段階に早く進むことができていくのではないだろうか。実際の授業でもできるだけ具体的な説明と実践を心掛けている。ピアノ指導法の研究にあたっては、

学生のグループ分けや条件付きでの比較を実施していないため、明確な根拠を示すことはできないが、具体的な関連付けや意識付けを行うことによって学生の理解と課題の習得状況も良く、学習意欲も高まっているように感じている。譜読みに時間がかからなくなった効果として、その先の表現に多くの時間を費やすことができるようになっている。

実際に保育園に子供を通わせている保護者から、「ピアノの伴奏がすべてドミソの和音だけでただ演奏されているのを聞くと、心が痛む」という言葉を聞いたことがある。幼稚園教育要領の第２章「表現」に「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。」「音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」とあるように、音楽を「表現する」ことが求められている[13)]。子供に対して保育者が魅力的なアプローチをすることができれば、より子供たちの表現力や創造性を引き出すことができるであろう。難しい曲を弾くことが大切なのではない。子供たちと向き合い、子供たちの様子を見ながらピアノを弾くという行為は、保育者自身に余裕がなければできないことである。難しい楽譜を簡略化することも一つの方法であるが、それも知識や技術がないとできないことである。本稿では、楽譜から読み解く技術的な側面の研究となったが、音楽的な表現力を身に付けた魅力ある保育者を育成するために、今後もより実践的なピアノ指導法の研究を進めていきたい。

注

１）中村利平：洋楽導入者の軌跡－日本近代洋楽史諸説－，201-222頁，刀水書房，1993.
２）横溝聡子：郡山市におけるピアノ教育について，郡山女子大学紀要　第52集，293-295頁，2016.
３）現代日本教育制度資料編集委員会：幼稚園設置基準（昭和31年12月13日文部省令第32号），現代日本教育制度資料９，469頁，東京法令出版株式会社，1985.
４）ピアノ・テキスト編集委員会：幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト改訂版－レッスン24とその応用－，ドレミ楽譜出版社，2014.
５）ピアノ・テキスト編集委員会編著：前掲書，64頁.
６）津布楽杏里・桑原章寧共著：保育・教育の現場で使える！弾き歌いピアノ曲集，23頁，ドレミ楽譜出版社，2015.
７）ピアノ・テキスト編集委員会：前掲書，78-79頁.
８）津布楽杏里・桑原章寧共著：前掲書，25頁.
９）全国大学音楽教育学会編著：明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌，音楽之友社，2013.
10）津布楽杏里・桑原章寧共著：前掲書.
11）安田寛：バイエルの謎　日本文化になったピアノ教則本，140-143頁，音楽之友社，2012.
12）バイエル：ピアノ教則本　Op101，全音楽譜出版社.
13）文部科学省：幼稚園教育要領，www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/（参照2017.8.30）